

Title	陸奥国尾太鉦山と泉屋又三郎
Author(s)	長谷川, 成一
Citation	住友史料叢書月報. 18, 2003, p.2-4
Issue Date	2003-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10129/2729
Rights	本文データは思文閣出版の許諾に基づき複製し, 掲載したものである。
Text version	publ isher

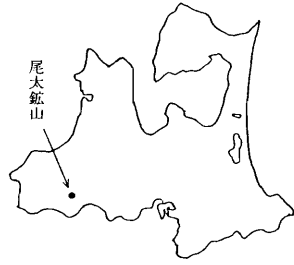


<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>

陸奥国尾太鉦山と泉屋又三郎

長谷川 成一

尾太鉦山（青森県中津軽郡西目屋村）は、陸奥国津軽領最大の鉦山で、かつて銀・銅・鉛の非鉄金属を大量に産出した（地図参照）。寛政八年（一七九六）秋、当鉦山の付近を旅行した菅江真澄は「雪の母呂太奇」に「オツフの名はもと蝦夷いへるなるべし」と地名の由来を述べ、出羽国との境にそびえる山の「銅ほるところ」と、銅鉦山であると記している（『菅江真澄全集』第三卷、未來社、一九



尾太鉦山の位置

七八年)。十八世紀前半より尾太鉦山は、銅の産出が盛んになっていいたから、このように真澄は記述したのであった。時期はさかのぼるが、「元禄十五年（一七〇二）の諸国銅山寛」（『泉屋叢考』第一輯所収、一九五九年）に「尾太 津軽越中守様御領分」と書き上げられ、同鉦山は仙台藩領の四カ銅山、盛岡藩領一四カ銅山とともに、陸奥国の代表的な銅山の一つとして、住友友芳から江戸幕府勘定奉行の荻原重秀へ報告された。

さて、右の尾太鉦山については、従来、本格的な研究がなされておらず、昨年、拙稿「尾太以前——近世前期津軽領鉦山の復元と鉦山開発——」（『青森県史研究』七号、二〇〇二年）が出て、ようやく近世津軽領の鉦山研究の端緒が開かれたに過ぎない。そのなかで泉屋又三郎に関して触れるところがあり、その点について今井典子氏から貴重なご教示をいただいた。本稿では、今まで住友の鉦業史研究のなかでも触れられることのなかった、津軽領における泉屋又三郎（以下、又三郎と略記）の活動について紹介し、十七世紀後半、大坂の住友家による奥羽地方の銅山開発の一端を明らかにしておきたい。

津軽領の鉦山開発に又三郎が出てくるのは、「弘前藩庁日記 御国日記」（弘前市立図書館蔵、以下「国日記」と略記）天和元年

（一六八一）六月二十九日条である。弘前藩では、同年六月、又三郎に「大沢之内中泊」（弘前市大和沢）に銅山見立てを依頼した。また「国日記」元禄十三年十月二十四日条によれば、天和二年まで秋田の角助が尾太鉦山の山先として銅の採掘をしたが、大きな損失を生じて経営を停止した。その後、又三郎と津軽出身の山師二階弥三左衛門が尾太鉦山に取り掛かったが、それも成就しなかった、とある。

ついで「国日記」天和三年五月八日条に見える「尾太鉦山の山勢回復に関する口上書」は、かつて弘前藩金銀銅惣山奉行の唐牛与右衛門の下で鉦山役人を務め、引き続き鉦山の役務に就いていた黒石九左衛門と笹森治左衛門が、「尾太御山諸色委細帳面」を江戸藩邸に提出して、尾太銀銅山の現状と各問題点を報告し、それについて藩主や家老の裁定を仰いだものである。又三郎と尾太鉦山については、第三条目に記述が見え、主旨は、次のとおりである。

「御手前山」（御手山のこと）の時分に吹き残した銅鉦石が、五〇〇〇荷ほど残存していた。それを昨年（天和二年）、又三郎に一〇分二の役（二〇パーセント上納）で製鍊させたが、ほとんど目に見える収穫がなく、断念した経緯があった。これは尾太山と中之沢（なかのさわ）で三・四年間掘い置いた鉦石で、雨雪にさらしたため、「生石」になってしまったようだ。雪消えとともに山中に捨て置いた鉦石の再製鍊を、蔵米一〇〇俵、銀一貫目、人足一〇人でもって実施してしまいたい。銅鉦石五〇〇〇荷からは銅五〇箇ほどを得られる予定だが、さらに損がかさむようであれば中止する。ただし望みの者がいなければ、そのままということになるう、というものであった。右

の提案に対して、藩首脳は全面的に了承を与えた。

十七世紀後半、住友家は、奥羽地方の銅山開発に乗り出し、鹿角郡の立石・鶴・十和田、出羽国では幸生・三枚・楨沢・板木沢・加久知・七十枚の各銅鉛山に関与した。なかでも、又三郎は延宝六年（一六七八）から同九年にわたって十和田鉛山に、特に深くかかわったという。また会津黒沢村銅山（福島県耶麻郡西会津町）の敷には、年代不明なるも「先泉屋又三郎稼捨」との記述が見え（『住友史料叢書 宝の山』思文閣出版、一九九一年）、又三郎は秋田領・南部領だけでなく会津若松領まで進出していたようだ。

右に見たように弘前藩では、又三郎へ領内鉱山の見立てと尾太鉱山の再建、さらには吹残しの銅鉱石の製錬を依頼した。又三郎は、前記の十和田鉛山の経営を軌道に乗せた後、津軽領に入り込んだのであろう。津軽の山師二階とともに又三郎が、尾太鉱山の経営を任されたという「国日記」の記録からは、住友家が又三郎を介して本格的に津軽領内銅山開発に参画しようとしていたのではないかと考えられる。ところが、又三郎は貞享五年（『元禄元、一六八八』七月に死去したので（前掲『泉屋叢考』第一一輯）、住友家の企画は頓挫したようだ。

従来、住友家は四国の別子銅山開坑以前、奥羽地方では秋田・南部、会津若松領や出羽国南部の銅鉛山の開発を手がけてきたと言われてきた。しかし津軽領でも又三郎を通じて領内銅山の見立て、尾太銅鉛山の再開発と銅製錬を通じて深く関わっていたのである。住友家は北奥羽の銅鉛山へ、ほぼ全域にわたって関与したといえよう。

（弘前大学大学院地域社会研究科教授）